

令和7年度第1回高知県産業振興計画フォローアップ委員会農業部会 議事概要

日時：令和7年10月21日（火） 14：00～16：00

場所：高知県立県民文化ホール 第6多目的室

出席：委員10名中、9名が出席

議事：（1）第5期産業振興計画＜農業分野＞の令和7年度上半期の進捗状況及び強化の方向性について

議事（1）について、県から説明し、意見交換を行った。（主な意見は下記のとおり）

議事については、すべて了承された。

※意見交換概要（以下、意見交換部分は常体で記載）

（1）第5期産業振興計画＜農業分野＞の令和7年度上半期の進捗状況及び強化の方向性について

（久岡部会長）

- ・夏場の高温対策として、高温耐性品種に加えて、作業者に対する冷房やミストなどの対策にも要望があるが支援策はあるか。

（千光士環境農業推進課長）

- ・昨年度から、働きやすい環境づくりという観点からトイレや休憩室等の整備に対する補助事業を開始した。今年度は熱中症予防の普及啓発・注意喚起を県内の農家へ周知を徹底した。一方で、作業者に対する直接的な支援はないのが現状であるため、他産業とも足並みを揃えて対応させていただきたい。

（青木農業振興部副部長）

- ・高温対策の資材として遮熱フィルムを使用することで、ハウス内の温度が2～3度下がる結果が出てきており、作業者への負担軽減も期待できる。資材の導入については、県単での補助としてメニュー化しており、一部では既に導入いただいている。これらの結果を周知し、来年度以降、資材導入の加速を図っていきたい。
- ・高温耐性品種について、水稻やナシの品種開発を進めている。野菜については、本県の主要品目であるナス、ピーマン、シシトウでは、品種開発に着手しているが、高温耐性の品種は今のところない。品種開発にはしばらく時間がかかるが、スピード感を持って、できるかできないかも含め2、3年以内に、説明できるようにしていきたいと考えている。

(山下部会員)

- ・高温対策に関して、JA 青壮年部からの要望を繋げていただく。

近年の地球温暖化の影響により全国的に最高気温が上昇しており、関東や中部地方では 40 度近い気温の地域もある。高知県は現在のところ 32 度程度に収まっているが、今後 40 度を超えてくることも想定されるため、高温条件下でも品質と生産量を維持するための栽培技術を早めに確立してほしい。全国的に高温で生産量が減少する中で、高知県だけが例年並みに生産量を維持できれば、結果として販売単価を上げることにつながると思われるので、今のうちに先行投資をして技術開発を進めていただきたい。具体的には、高温による被害が発生している県外産地を視察し、被害の状況や対策等について生産者や JA 職員等の現地の生の声を聞いて、高知県の技術開発に活かしてほしい。

- ・高温対策の対象の幅を広げてほしい。
- ・水稻の高温耐性品種「にじのきらめき」について、高知県での栽培適性を調べてほしい。

(千光士環境農業推進課長)

- ・「にじのきらめき」については、本年度から栽培試験を進めており、次年度は、作型の検討などを本格的に進めていく予定。また、その他の高温耐性品種についても検討を進める。高温耐性品種の開発については、高育 58 号の現地調査を進めている。

(青木農業振興部副部長)

- ・新たに育成された品種は営利目的で販売されてしまうと品種登録できない問題がある。新品种を本格販売するにあたっては、JA も一緒になって販売戦略を考えていただき、ベクトルを合わせた取り組みにつなげていきたい。

(濱田副部会長)

- ・水稻の稲刈りは、7～8月の体温よりも高い高温下での作業となるため、エアコン付きのコンバインの購入に対して補助をお願いできないか。

(青木農業振興部副部長)

- ・水稻への支援については、現在の情勢もあり強化したいと考えている。栽培面積など一定の条件を設け、規模拡大や地域の農業を担ってくれる方への支援を行いたい。
- ・集落営農組織や共同利用であれば現在でも補助の対象となるので、検討いただきたい。

(山下部会員)

- ・新規就農者の確保に関連して、鹿児島県では、神奈川県から就農するルートができているとの話を聞いた。高知県でも東京、大阪で PR をしていると聞いているが、新規就農者を高知に引き込んでこられるような取り組みを引き続き行ってほしい。

(田村農業担い手支援課長)

- ・県外での新規就農者の呼び込みについては、主に高知県農業会議に新規就農相談センターという看板を掲げて相談窓口をやっている。国が主催する農業人フェアにも出展し高知県への呼び込みを行っている。
- ・就農セミナーを東京と大阪で、本年度はそれぞれ2回ずつ開催し、この中で高知県への就農、高知県の農業の紹介に加えて、高知県に移住した方や先輩の農家さんと直に話せる機会を設けている。
- ・一方で、最近はセミナーへの参加者が減少しており、参加者をいかに増やしていくかというところが大きな課題となっている。

(久岡部会長)

- ・就農相談会への参加者の内訳を教えてください。

(田村農業担い手支援課長)

- ・就農セミナーへの参加者数は、大阪では7月26日が4名、9月27日が1名の出席、東京では8月2日が6名の出席であった。就農セミナーはオンラインでも一度開催しており、6月29日にオンラインで開催した際には49名の方に参加をいただいた。オンライン参加の方は、具体的に就農を決めたというよりも、まずは少し話を聞きたい方が多いため、いかに個別相談に繋げるかが課題。

(松村農業振興部長)

- ・令和6年の新規就農者数が171人で、前年から40名以上減少しており、非常に危機感をもっている。産業振興計画によって、フェアへの出展やデジタルマーケティングなどの取り組みを行っているが、就農者数が増えてないという実情もあるため、鹿児島県の例など成功事例を取り入れていきたい。

(富田部会員)

- ・鹿児島県で新規就農者が増加している背景には、仕事とプライベートの充実があると思われる。365日ずっと働き続けるわけではないので、仕事以外の時間をいかに充実させられるか、県の魅力をアピールすることが新規就農者を他県から引っ張ってくるためには重要。
- ・全国的に栽培面積が減少している中で生産量を維持することができれば、生産者の所得を大幅に向上させる可能性が十分にある。
- ・販売単価については、消費者の可処分所得が上がっていない現状で、どんどん上げていくことは非常に難しい。これまで青果物は需要と供給のバランスによって価格が形成されてきたが、それでは生産者がやっていけないという産地からの声に応じるため、我々も販売

に努めて参りたい。

(青木農業振興部副部長)

- ・委員からお話いただいた鹿児島県の例は志布志だと思われる。志布志市では、農業公社がピーマンの研修生を積極的に受け入れ、2、3年研修した後、志布志だけではなく、基本的に鹿児島県内に就農している方が多いというのは、我々も承知している。
- ・高知県にも、農業担い手育成センターの研修施設や安芸市が所有する研修ハウスがあり、農業を志す方が安心して技術を習得できる環境を考えていくことが大切だと思っている。
- ・委員の意見も踏まえ、高知県としてPRできることをしっかり取り入れていきたいと思う。

(久岡部会長)

- ・畜産の関係で、輸出に関する取り組みについて詳細を聞きたい。

(谷本畜産振興課長)

- ・5月にタイのバンコクで開催された展示商談会へ出展した。現地では、タイ以外の国の方も多く、赤身肉に対して非常に評価が高かった。一方で、高級部位にしか需要がなく、それ以外の部位の販売に困っているため、一頭買いしてくれるパートナーを探してる。

(久岡部会長)

- ・あかうしの頭数は十分確保できるのか。

(谷本畜産振興課長)

- ・子牛の育成に課題がある。来年度からは、子牛の育て方をJAと一緒に支援することで質の高い子牛を増頭し、品質の高いあかうしの出荷頭数を増やしたい。

(永森部会員)

- ・気候変動に対する補助に関して、JA 営農センターでスムーズに案内を受けられるように、県からJAに対してPRをしてほしい。

(平田イノベーション推進課長)

- ・県とJAグループでは、月1回情報交換を行っており、特に、高温対策については情報共有を行っている。改めてご意見があったことを踏まえて、県の普及現場やJAの現場でも、実際に農家さんとコンタクトをとるすべての職員がきっちりと補助事業の説明ができるように連携をとらせていただきたい。

(宮地部会員)

- ・農業大学の学生うち、卒業後に就農している人数を教えてください。
- ・SAWACHI の加入者が目標に比べて少ない理由は何か。

(田村農業担い手支援課長)

- ・令和6年度、卒業後に就農した学生は5名。令和5年度は4名。就農以外には、JA、農機具メーカーなど農業関連の企業への就職が多い。卒業後すぐには就農せず、農業関連の企業で数年勤務した後、就農している事例もある。

(平田農業イノベーション推進課長)

- ・SAWACHI 未加入者は、ハウスが古く、60代以上の方が多い。このような方々には、できることからデータを活用した栽培管理ができるように取り組んでいきたい。
- ・50代以下でもまだ半数程度しか加入していないので、この方たちに働きかけを行っていく。

(青木農業振興部副部長)

- ・農業大学の卒業生は、基本的に、卒業生の2割から3割が就農している。農業関連の企業で数年仕事をした後、就農される方も多く、卒業後5年から10年以内に、就農される方を含めると大体20代では半分ぐらいの方が就農している。

(中山部会員)

- ・弊社でも土佐黒牛を取り扱っているが、現在の価格では苦戦している。比較的安価なF1交雑種の検討はしていないのか。
- ・コロナ禍以降、食の様式が変わってきており、特に冷凍食品の売れ行きが伸びている。高知県産の農産物も冷凍加工を検討してみてはどうか。

(谷本畜産振興課長)

- ・交雑種に関して、県内では窪川牛があるが、需要と供給のバランスをとりながら生産しており、現在のところ増頭にはなっていない。
- ・土佐黒牛については、黒毛和牛は全国的に有名ブランドが乱立し、競争も激しい。一方、県内での土佐黒牛のシェアは2割程度。まずは県内でのPRによって消費拡大を図ってきたい。

(田畑農産物マーケティング戦略課長)

- ・高知県内で冷凍で周年供給できている代表的な品目としてユズがある。
- ・施設野菜については、4～5月の収穫量が非常に多くなる時期に収穫物をストックできれ

ば一つのいい方法になると思う。現在のところ業務需要向けの出荷に取り組んでいるが、今後、冷凍技術が高まれば可能性が出てくる。

(久岡部会長)

- ・第5期産業振興計画の取組では、データ駆動型農業による反収の最大化や、法人化・経営管理能力向上に向けた支援等、時給1,500円になった場合でも現状の所得が維持できるような取り組みや、喫緊の課題である夏期の高温対策の取り組み等が進められている。

(以上)